

登場人物

シテ 深草の少将の霊

瘦男(河津)・黒頭・結水衣・

白大口

前ツレ 里の女 小面・唐織

後ツレ 小野小町の霊

小面・唐織

ワキ 八瀬の僧 角帽子・結水衣・無地熨斗目

構成と梗概

- 1 ワキの登場 八瀬^やの山里の僧(ワキ)が日参の女性を待つ。
- 2 ツレの登場 市原野に住む女(前ツレ)が木の実爪木を携えて日参の旨を述べる。
- 3 ツレ・ワキの応対 女は木の実の数々を語る。
- 4 ツレの中入り 女は僧に小野小町であることをほのめかして消える。
- 5 ワキの独白 僧は小町の古歌と思い合せて、女が小町の幽霊であると察する。
- 6 ワキの待受け 僧は市原野に赴き供養する。
- 7 後ツレ・シテの登場 小町の亡霊(後ツレ)が現われ、そのあとを追って、身を隠した四位の少将の亡霊(シテ)が現われる。小町は回向を喜んで受戒を乞い、少将はそれを妨げようと手を尽す。
- 8 ツレ・シテの物語り 僧は二人に懺悔を勧め、二人は百夜通いを再現する。少将の苦悩。
- 9 結末 満願の日の少将の歎喜と、二人の成仏。

備考

* 四番目物、略二番目物。太鼓なし。

* 観世・宝生・金春・金剛・喜多の五流にある。

* 底本役指定は、シテ、ツレ女・ツレ女、ワキ、同、地。

一 京都市北郊、比叡山西麓の地。

二 夏安居。四月から七月に至る九十日間、籠^こ居して修行すること。 1

三 「いづくとも知らず」は「来たり候」にかかる。どこに住むのかわからぬ身元不明の女性。

四 指先で折り取った木の枝の意。薪のための小枝。

五 へどこに住む人か、名前を尋ねようと思います。

六 「爪木」は「棲」に音通で「袖」と縁語。 2

「ひろふトアラバ、椎、妻木」(『連珠合璧集』)。「薰物」は香木を合わせて煉^ねった香。

七 へ薰物の匂いもない粗末な着物なのが悲しいことだ。

八 京都市北郊、鞍馬街道沿いの山間地。

九 へ尊い上人がいらっしゃいますので。

一〇 へ今日もまた参上しました。

3

【名ノリ笛】でワキが登場 常座に立つ

【名ノリ】 正面へ向き 常座に立つ
「これは八瀬の山里に一夏を送る僧にて候 ここにい

づくとも知らず女性一人 毎日木の実爪木を持ちて来たり候 今日

も来たりて候はば いづくの人ぞと名を尋ねばやと思ひ候 脇座に着座

【次第】でツレが木の葉の入った手籠を持ち登場

【次第】 常座に立ち ツレへ 拾ふ爪木もたきものの 拾ふ爪木もたきものの 匂は

ぬ袖ぞ悲しき

【名ノリ】 正面を向き 八瀬の山里に 尊き人のおん入り候ふほどに いつも木の実爪木を

持ちて参り候 今日もまた参らばやと思ひ候

【問答】 ツレへ いかにかに申し候 またこそ参りて候へ

ツレへ 真中に出て坐る 着座のまま ツレへ いつもの

一 古写本に「数々の名を」とあるに同意。

二 下掛りは次に「サシ」がある。解題参照。

三 かつては車を見慣れ、乗り慣れた身であることを言う。四位少将（後出）の車をも連想させる。

四 「椎輪為大輅之始、大輅寧有椎輪之質」（『文選』「明文抄」所引）などに基づき、「車トアラバ…椎」

（『連珠合璧集』。「車を作る椎の木」（『金札』）等。

五 歌人の代表（『古今集』仮名序）としての柿本人麿（人丸）・山辺赤人に木の実を取り合せた。

六 人丸は「柿の木の下に化現せしかば、姓をば柿下とたまはる」（『玉伝深秘』）という。「垣ほ」（垣）は

「柿」と重韻の文飾。

七 赤人は「上総の国山辺郡の人なり。彼の所に笹栗とてたけ一尺ばかりあるに栗のなると」（『古今栄雅抄』）という。

八 「窓トアラバ…梅」、「園トアラバ…桃」（『連珠合璧集』）。

九 へ花の名を持つ桜麻が生える芋生の浦の梨は、名は、「無し」だがやっぱり有る。「桜麻」は麻の一種。

「桜麻の芋生の浦波立ち返り見れどもあかず山梨の花」（『新古今集』雑上、俊賴）、「片枝さすをふの浦梨初秋に…」（『新古今集』夏、宮内卿）などによる。芋生の

浦は歌枕。「頭昭云…をふの浦は伊勢国にあり。斎宮御庄献梨所也」（『袖中抄』）。以上、慣用句の 5

「桜梅桃李」に宛てて連ねた。

一〇 「櫟」（い・い・い・い）に「香椎」「真手葉椎」と

来たり給ふ人か 今日はこの木の実の数かずおん物語り候へ

「ロンギ」 ツレへ拾ふ木の実はなにになにぞ 地へ拾ふ木の実はなに

なにぞ ツレへいにしへ見慣れし 車に似たるは 嵐に脆き落ち

椎 地へ歌人の家の木の实には ツレへ人丸の垣ほの柿 山の辺

のささ栗 地へ窓の梅 ツレへ蘭の桃 ツレへ花の名にある桜

麻の 芋生の浦梨なほもあり 櫟香椎真手葉椎 大小柑子金柑

あはれ昔の恋しきは 花橘のひと枝 花橘のひと枝

「問答」 ワキ 「木の実の数かずは承りぬ さてさておん身はいかな

る人ぞ おん名を名のり給ふべし

「上ゲ歌」 ツレへ恥づかしや己が名を 地へをのとは言はじ 薄生

ひたる 市原野辺に住む姥ぞ 跡弔ひ給へお僧とて かき消すやう

正面を向き 消え失せた体で後見座へ退る

に失せにけり かき消すやうに失せにけり

「□」 ワキ 「かかる不思議なることこそ候はね ただいまの女をく

はしく尋ねて候へば をのとは言はじ薄生ひたる 市原野に住む姥

椎の異種名を重ねた。「椎」は四位少将を暗示するか。

二「柑子」「金柑」「橘」、ともに柑橘類の名。

三「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(『古今集』夏)による。

四「私の名を自分から小野の小町などとは申しますまい」。注一七の歌をふまえる。

五「現行諸流とも若い女として演出。本来は姥か」。

六「古写本に「ここに古きことの候を思ひ出だして候」とする」。

七「以下の説話は解題参照。市原野とする根拠未詳」。

八「秋風の吹くにつけても、髑髏となつた目の間から生い出た薄が靡いて、ああ目の痛むこと。それにつけても、こんな姿を私が小野小町だとは言ふまい」。

九「座具」は礼拝の時に用いる敷物。「長四尺、広三尺」(『翻訳名義集』)。

一〇「死者を回向する時の常套文句。『求塚』等」。

一一「戒」は仏道に入つた者の守るべき戒律。それを受けることにより仏道に帰依し成仏の道が開かれる。

一二「いやそれは駄目ですよ」。

一三「これはまあどうしたこと、せつかくこんな有難い仏縁に逢うことができたと思えば、それを邪魔して相変らず地獄の苦しい目に逢わせようとするのか」。

一四「二人一緒に見るさえ悲しい苦患を、まして一人と残されたら、の意」。

一五「以下はまたどうしたこと、せつかくこんな有難い仏縁に逢うことができたと思えば、それを邪魔して相変らず地獄の苦しい目に逢わせようとするのか」。

にてあると申し かき消すやうに失せて候 一五 ここに思ひ合はするこ
との候 一六 ある人市原野を通りしに イチワラノ 薄一叢生ひたる蔭よりも カゲ へ秋
風の吹くにつけてもあなめあなめ 「をのとは言はじ薄生ひけりと
あり オノ これ小野の小町の歌なり コマチ 疑ふところもなくただいまの女
は 小野の小町の幽霊と思ひ候ふほどに イウレイ かの市原野に行き イチワラノ 小町
の跡を弔らはばやと思ひ候 トム
「上ゲ歌」 ソオアシノ ワキへこの草庵を立ち出でて イ 立つて歩行の体
この草庵を立ち出でて な
ほ草深く露繁き シゲ 市原野辺に尋ね行き イチワラノ 座具を展べ香を焚き ザハ
数珠を手に合掌 ナ 南無幽霊成等正覚 ムイウレイシヨオトシヨオガク 出離生死頓証菩提 シュツリシヨオジトシヨオボダイ 脇座に戻り着座
【誦】 ワキ へ南無幽霊成等正覚 ナ 出離生死頓証菩提 ムイウレイシヨオトシヨオガク 脇座に戻り着座
【一声】で幕が上がりシテが被衣で頭から身をかくして登場 低い姿勢で椅掛りを歩み出る
ツレは幕が上がるとともに後見座から出て常座に立つ
【掛ケ合】 ツレ へ嬉しのお僧の弔らひやな トム 同じくは戒授け給へや カイサス
お僧 シテ へいや叶ふまじとよ戒授け給はば カイ 恨み申すべしはや
帰りに給へお僧 シテ へ向き ニ ツレへこはいかにたまたまかかる法に逢へば ソウ な
ほその苦患を見せんとや クゲン シテへふたり見るだに悲しきに ニ おん

一「あなた一人が成仏できたら」。

二「私の邪姪の思ひは二重に重なつて、つらい目を見る三途の川に沈んでしまふ。そうなたら、小町一人に戒を授けたかいもありますまい」。「さらぬだに重きが上の小夜衣わが妻ならぬつまな重ねそ」(『新古今集』釈教、不邪姪戒。寂然法師)。「沈み」は「憂き」(「浮き」と音通)と縁語。

三 現行諸流はワキ僧は一人。古型はワキ連も登場か。

四「今はなお邪姪に迷つていても、戒を受けたらその法力に引かれて、成仏できぬことはあるまい」。

五「人(少将)の心はいざ知らず、戒を求めようとの私の決心に曇りはない」。受戒の強い決心を示す。「雲」「曇」「月」と縁語。心を月に譬えることも常套表現。「月トアラバ：出入」(『連珠合璧集』)。

六「薄生ひけり」(前頁注一七参照)をふまえる。

七「姿を隠していた私も身を現わしてこのように招き引き止めるからには受戒を思い止まれ」。「穂に出づ」は人目につく、の意。「尾花」は薄のこと。「薄トアラバ、穂に出る、…まねく」(『連珠合璧集』)。

八「思い(受戒の決心)は山の鹿同様いくら招き止めても止まることはできません」。「煩惱は家の犬、打てども去ることなく、菩提は山の鹿、つなげどもとまり難し」(『宝物集』)等。「鹿」は現行観世のみカセキ。前行「招かば」に対し「招くと」という。

九「それでは私は「煩惱の犬」となつてたとえ打たれようと離れることではない」。

8

身一人仏道ならばわが思ひ 重きが上の小夜衣 重ねて憂き目を見
(見・イチニシブツドオ) 三瀬川) つせがはに 沈み果てなばお僧の 授け給へるかひもあるまじ 被衣を少し上げてワキへ 三ソオタチ や帰り給へやお僧達

「ロンギ」 地へなほもその身は迷ふとも なほもその身は迷ふと
シテとツレは正面を向く

も 戒力に引かれれば などか仏道ならざらん ただ共に戒を受け給
カイリキ フツドオ トモ カイ

へ ツレへ人の心はしらくもの われは曇らじ心の月 出でてお
五 (知らず・白雲) ツレはワキへ

僧に弔はれんと 薄押し分けへ出でければ
ススキ シテは左右に押分ける体で前へ出 シテ包めどわ

れも穂に出でて 包めどわれも穂に出でて 尾花招かば止まれか
ホ セ オバナ ツレを見手招きする

し 面を伏せハ 思ひは山の鹿にて 招くとさらに止まるまじ
ツレ ツレを見こむ ツレは正面を向きシテを

さらば煩惱の犬となつて 打たるると離れじ 地へ恐ろしの姿
ボシノオ 近うきつつ ツレを見こむ ツレは正面を向きシテを

避ける ツレの右袖を両手で引張り ツレの方へ引張られ 再び引張つて
シテ袂を取つて引き止むる 地へ引かるる袖も シテ

控ふる 袖を放してタラタラと退り 数拍子 地へわが袂も ともに涙の露 ふかくさの少将
ヒコオ 袖を放してタラタラと退り 数拍子 地へわが袂も ともに涙の露 ふかくさの少将

「(問答)」 ワキ「さては小野の小町四位の少将にてましますかや 懺
着座のまま二人へ シイ シヨオシヨオ

悔に罪を滅ぼし給へ ツレへ向き シテ「さらばおことは車の櫓に百夜待ちし
ゲ ツミ ホロ ツレへ向き シテ「さらばおことは車の櫓に百夜待ちし

一〇 深草の四位の少将。解題参照。

二 過去の罪を告白して悔い改めるのが懺悔で、滅罪を得る。具体的には百夜通いを再現し、「まなぶ」（まねる）こと。なお「懺悔に…」以下は、現行五流とも「とても」の事に車の櫓に百夜通ひしところをまなうでおん見せ候へ」と改める。解題参照。

三「車の櫓に百夜通へ」（三四七頁四行目）というのが少将の求愛に対する小町の条件。

三へこのような迷妄のあることとは思ひもよらず。「思ひもよらぬ」は前後にかかる。

一四「物見」（人に見られること）が憚られる、の意を「車」の縁で「忍び車」（微行の車）「車の物見」（牛車の窓）と続ける。

一五『萬葉集』以来様々に変形して伝えられる歌。「山城の木幡の里に馬はあれど君を思へばかちにてぞ行く」（島原松平文庫本『唯独自見集』）が近似。

一六上の「簑」と重韻。

一七「世」は「節」に音通で「竹」の縁語。

一八へ月夜には行くにも暗くはない。

一九「幾度袖を払はまし」、「袖打ち払ふ蔭もなし」など、雪の古歌の表現を借る。

二〇「目に見えぬ鬼神」（『古今集』仮名序）、「鬼一口」（『伊勢物語』六段）をつなぐ。「雨夜トアラバ…鬼一口」（『連珠合璧集』）。

二へわが身ひとりだけに降るのは涙の雨か。

三へ（その涙に昏れて）ああ暗い夜だこと。

ところを申させ給へ われはまた百夜通ひしところをまなうで見せ申し候ふべし

「掛け合」 脇座へ行きながら （知らず・白雲） 二（掛・斯） 脇座
ツレへもとよりわれはしらくもの かかる迷ひのありける

とは 脇座 ツレへ向き シテ 「思ひもよらぬ車の櫓に 百夜通へと偽りしを へ真
と思ひ 「曉ごとくに忍び車の櫓に行けば 着座のまま ツレへ車の物見もつつま

しや 姿を変へよと言ひしかば シテ 「輿車は言ふに及ばず

ツレへいつか思ひは 地へやましろの木幡の里に馬はあれども

ツレを見こみ常座へ行くカチハダシ 後見から笠を受取り 正面を向き 手にした笠を見

シテへ君を思へば徒歩跣足 ツレへさてその姿は シテへ笠に簑

ツレへ身の憂き世とや竹の杖 シテ 「つきには行くも暗からず

ツレ「さて雪には シテ 「袖を打ち払ひ ツレへさて雨の夜は 笠で顔

を隠し二〇 笠を下ろしてヒトクチ 向うを見こみ ツレへたまたま曇らぬ時だ

シテへ目に見えぬ 「鬼一口も恐ろしや 目付で笠をかざしミヒトリ 見上げ 足拍子を踏み笠を下ろし

にも シテへ身一人に降る涙の雨か

【立回り】 闇夜の百夜通いの表現
常座で笠を 二二三 両手にかざし
シテへあら暗の夜や

一「あれやこれやと様々な物思ひをすることよ」。恋
愛の情の類型表現。

二「夕暮はどうだというのか」。詰問の体。

三「小町は、月は待っているだろう。彼女はその月
を待っているのであって、私を待つのではあるまい。
思わせぶりの嘘を言うことよ」。「月は待つらん」は、
月は自分を待つかも知れないが、彼女はそうではある
まい、の意にも解される。

四「暁は後朝の別れのつらさに物思ふ時だが、別れ
の時を告げる鳥も鳴くなら鳴け、鐘も鳴れ、夜も明け
よ、人にはつらい思ひをさせる別れの時も、私が独り
寝であるなら少しもつらくはないはずだ」。

五「楊の端書の数を見てみると」。「楊」は牛車の
轆を置く台。「楊の端書」は、女の許へ九十九夜まで
通った数を楊の端に書きつけたという説話（『奥義抄』
等。解題参照）に基づく。

六「服装はどうだろう」。

七上部を折った形の烏帽子。「笠」と重韻。

八「草花を摺って染めた衣の色目を襲ねて」。

九「紫トアラバ：藤：藤袴」（『連珠合璧集』）。

一〇「彼女も待っているだろう。ああ気忙しいこと」。

二「着付けも気高く整えて」。九十九夜になり、あと
「ひと夜を待たで死したりし」（『卒都婆小町』）

形が百夜通いの説話で、ここが百夜目に逢う形 9
であるのは懺悔の結果としての成仏を意図したらしい
が、原型ではあるまい。以下の結末部も唐突で、この

「（一セイ）」 ツレへ夕暮は ひとかたならぬ思ひかな

「ノリ地」 ツレへ向きニ シテへ夕暮はなにと 地へひとかたならぬ 思ひかな

「」 シテへ月 三 空を見上げ 月は待つらん月をば待つらん ツレへ 笠を前に構え見こむ われをば待たじ 虚言や

「ノリ地」 地へ暁は 暁は 数かず多き 思ひかな シテへわがた

めならば 地へ（ハ）鳥もよし鳴け 鐘もただ鳴れ 夜も明けよ た

常座に退つて安座し ツレ 面を伏せる
だ独り寝ならば 辛からじ

「ノリ地」 安座のまま顔を上げ シテへかやうに心を 尽くし尽くして 地へかやうに心

を 尽くし尽くして 楊の数かず よみて見たれば 九十九夜な

り 今 指を見つめ 今 嬉しやとて 待つ日になりぬ 急ぎて行かん

姿はいかに 笠に目をやうて捨てる 地へ笠も見苦し 地へ風折烏帽子

も脱ぎ捨て 箆を脱ぐ体 地へ花摺り衣の シテへ色襲ね 地へうらむらさ

きの 左の裾を見 シテへ藤袴 地へまつらんものを

「歌」 前へ出かかり イツガ 振返つて遠く西 キヨオを見 地へくれなゐの狩衣

の 衣紋気高く引き繕ひ エモンケタカ 足拍子 ツクロ オンジユ 左手の扇を盃に見立てサカズキ 前に出し膝をつく 飲酒はいかに 月の盃なりとても

前後は改作の疑いが強い。

二三「祝いの酒はどうしたものか。美酒の盃なりとも、酒を飲むのが戒律に触れるなら、その飲酒戒かんじゅかいを保持しよう」と。飲酒戒をふまえて言う。「月の盃」は盃を月に見立てた文飾でツキの重韻。

二三へたった一つ心中に思ったことが悟りとなつて。

イシワキを見こみ 舞台を回つて 二三 イチネン サト 戒めならば保たんと ただ一念の悟りにて 扇をはねて ツミ メッツレを指す心 多くの罪を滅して 小

野の小町も少将も ともに仏道成りにけり 常座で扇をたたみ 正面を向き合掌 脇正面 フツドオ を向き留拍子 ともに仏道成りにけり

登場人物

前シテ 里の女 若女・唐織
後ジテ 紀有常の娘の霊
ワキ 旅 僧 若女・初冠・長絹・縫箔腰巻
角帽子・桂水衣・無地熨斗目
アイ 所の男 長上下

構成と梗概

- 1 ワキの登場 諸国一見の僧(ワキ)が在原寺に立ち寄り、業平夫婦を偲んで弔う。
- 2 シテの登場 里の女(前シテ)が現われ、秋の夜の古寺に仏法帰依の心を述べる。
- 3 ワキ・シテの応対 僧は古塚に回向する女の素姓を問う。女は業平の昔を懐かしむ風情を見せる。
- 4 シテの物語り 女は『伊勢物語』の歌をめぐる業平と紀有常の娘の純愛について語る。
- 5 シテの中入り 女は、自分が井筒の女とも言われた紀有常の娘であると名乗って、井筒の蔭に消える。
- 6 アイの物語り 里の男(アイ)が僧の尋ねで業平と紀有常の娘のことを物語り、弔いを勧める。
- 7 ワキの待受け 僧は夢に見ることを期待して寝る。
- 8 後ジテの登場 業平の形見の衣を着た紀有常の娘(後ジテ)が現われ、人待つ女とも言われた業平への一途の純愛を示す。
- 9 シテの舞事 業平思慕の移り舞。
- 10 シテの立働ぎ・結末 われとわが身を井筒に映して業平を偲ぶ昂まりの中で、夜明けとともに僧の夢は覚める。

備考

- * 三番目物。太鼓なし。
- * 観世・宝生・金春・金剛・喜多の五流にある。
- * 井筒の作り物を出す。
- * 底本役指定は、シテ・後シテ、ワキ、同、地。
- * 間狂言は寛永九年本による。